患者の会話や食事 手助け

Working 私のお仕事
月1回 掲載

皆さんは言語聴覚士を知っていますか？　比較的新しい国家資格で、患者さんの「話す・聞く・食べる」を支援するリハビリの専門職です。言語聴覚士になって2年目の中村友紀さん(23)＝菊陽町＝を取材しました。

（西山美香）

言語聴覚士　中村友紀さん(23)

訓練、指導「信頼関係が大事」

脳卒中などの病気や事故などで、声を出したり、文字を読んだりすると話したり、文字を読んだりするのが難しい人に訓練を通して、話す、聞く、読む、書くことや食べることを手助けするのが言語聴覚士です。

「検査などで問題点を調べ、患者さんの状態や必要性に合わせて訓練や指導をします」と中村さん。言葉が理解できない、出てこない失語症の人には絵カードを使って言葉を引き出し、食べ物を飲み込むのが困難な人には、安全に食事ができるよう食事にとろみをつけるなどして訓練しています。

言語聴覚士を目指すようになったのは中学2年の時。祖母の病気がきっかけといいます。「話すこと、食べることができなくなった祖母に言語聴覚士がリハビリするのを見て、その存在を知った」と振り返ります。

今は多い時で5～7人の患者を担当。病気で気持ちが沈みがちな人に中村さんは明るく笑顔で接し、患者が前向きにリハビリできるよう努めています。

「信頼関係が大事。この人なら何でも話せると思ってもらえるよう患者さんに寄り添い、要望や思いを丁寧に聞いています」。コロナ禍で面会が制限される中、ビデオ通話で患者の家族にリハビリの様子を見てもらうなどしています。

訓練で、再び話したり食べたりできるようになる人も。「患者さんが生きる喜びを取り戻す手助けができる仕事に、とてもやりがいを感じています」

ビデオ通話で患者の様子を家族に伝えながら、食事の訓練をする中村友紀さん（熊本リハビリテーション病院提供）

子どもからお年寄りまで、患者さんの年齢層は幅広いです

患者さんや家族からの「ありがとう」にやりがいを感じます

◇プロフィル　1998年生まれ。菊陽中、熊本学園大付属高、熊本保健科学大（保健科学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）卒業。

どんな職場？

中村さんが働く熊本リハビリテーション病院（菊陽町）には、医師や看護師、セラピストなどが勤務。リハビリスタッフは約160人（言語聴覚士19人）いて、異なるリハビリを組み合わせて患者の治療効果や成果の向上に取り組んでいます。

ある日の中村さん

6：00	起床、朝食
7：30	出勤。患者さんのカルテ確認
8：30	仕事開始。患者さんのリハビリ、食事の様子を観察
12：00	昼食、休憩
13：00	リハビリ、患者さんの家族とビデオ通話で会話、カルテ記載
17：00	業務終了。翌日のリハビリの準備や勉強会など
18：30	退勤
19：00	夕食、入浴など
23：30	就寝

聞きたい！教えて！

―どうしたらなれる？

言語聴覚士になるには、国家試験に合格する必要があります。国家試験を受けるためには、高校を卒業して、必要な知識や技術などを学ぶ大学や専門学校に通います。県内には大学と専門学校が一つずつあり、私は熊本保健科学大のリハビリテーション学科で4年間学びました。

―必要な資格は？

言語聴覚士免許が必要です。1997年に国家資格となったリハビリテーションの専門職です。働く場所は病院や老人ホームなどの施設、小中学校、子どもの療育施設などです。

―どんな人が向いてる？

人と接したり、話をしたりするのが好きな人。いろんな人との出会いがあって、楽しい仕事ですよ。患者さんは子どもからお年寄りまで幅広く、病気や事故の後遺症などで悩みを抱えている方もいます。患者さんとの信頼関係を築くことが重要です。職場では医師や看護師、薬剤師、管理栄養士など、さまざまな職種の人と連携しながら仕事をします。

―子どもの頃、やっておいた方が良いことは？

あらゆる世代の人と話をして、交流する機会を多く持ってほしい。住んでいる地区の行事や祭りなどの地域活動や、ボランティア活動に参加するのもおすすめです。私は子どもの頃から近所のおじいちゃん、おばあちゃんと話すのが好きでした。それが今、仕事をする上で役に立っていると感じています。